

バーミヤーン遺跡の 石窟寺院遺構

—2005年11月建造物班調査—

はじめに 岩崖の崩壊に加え、長期にわたる戦乱、ターリバーンによる東・西大仏の爆破など、破壊、盗掘が著しい世界遺産・バーミヤーン遺跡は、その後、ユネスコの主導により国際的な専門家による遺跡保護のための緊急支援が進められてきた。国際的な協力体制のもと、独立行政法人文化財研究所は、2003年よりバーミヤーン遺跡保存事業のための調査団を現地に派遣している。2005年11月には、これまでの考古遺跡調査や壁画調査に加え、建造物班による第1回目の現地調査（11月10日～11月15日）をおこない、奈良文化財研究所から窪寺茂が、東京文化財研究所から岩出まゆがこの調査に参加した。一方、文化財研究所ではユネスコ文化遺産保存日本信託基金による「バーミヤーン遺跡保存事業」をアフガニスタン情報文化観光省との共同でおこなっている。この事業における人材育成の一環として、アフガニスタン側からモハメッド・タミーム・サーヘブザダ氏（歴史建造物局職員）を迎え、建造物班の調査を実施した。

ところで、建造物班では、今回の調査を予備調査と位置づけ、石窟寺院遺構と伝統的建造物を対象として、建築的要素の現状に関する基礎資料の蓄積のための調査を実施した。石窟寺院の遺構調査では、①石窟の空間構成およびその使用方法に関する調査、②建築的要素に関する調査、③石窟の保存状況に関する調査をおこない、伝統的建造物の遺構調査では、①建築構造および建築技法に関する調査、②保存状況に関する調査をおこなった。

本稿は、今回調査した石窟寺院遺構から2例を取り上げ、バーミヤーン遺跡における石窟寺院遺構の建築的要素とその保存状況の一端を紹介する。

調査成果（53-V窟） 方形平面で側壁が立ち上がり、方形のコーニス、方形のタンブールにいわゆるラテルネンデッケ天井が架けられている窟。側壁は内側への傾斜を持ち、入口を除く3面の中央には規模の大きい三葉型のニッチが穿たれ、側壁下端に台座が廻る。側壁は壁土層がほぼ失われ、元来の造形・装飾が不明になりつつある。側壁には各種のほぞ穴が規則的に穿たれている（図8）。このうちニッチ外周に沿って穿たれたほぞ穴は、



図8 53-V窟 内部見上げ

ニッチの縁取りを練り土で造形する際の木芯用ほぞ穴と考えられる。これに対し、ニッチ内部のほぞ穴はその配置から複数の彫像を支持する木芯用ほぞ穴と解釈して問題ないであろう。コーニス見付には一部に元来の植物連続文が残存し彩色層も残る。タンブールは1面当たりニッチを4面配置し、これを連続させてアーケードに見立て、アーケード下端の支柱は練り土で造形している。同所ニッチの縁取りは岩盤から造り出し、ニッチ上辺および見付上端角の縁取り、その下方見付面の渦巻状植物文は練り土で盛り上げて造形し、さらに彩色を施している。

また、同所ニッチ部の岩盤には二等辺三角形にほぞ穴が穿たれ、頂点ほぞ穴に木芯が残存している。下辺2点のほぞ穴は木芯をほぼ欠き、頂点よりも穴の規模が小さい。これらはいずれも彫像を支持する木芯用ほぞ穴と思われた。このニッチ内壁面には、彫像の後背の一部と考えられる練り土による飾りが残存している。また、ニッチ上部と天井間の壁面に2個のほぞ穴が横一列状に穿たれ、一部に木芯が残る。同所に千仏彫像が配されていたと推察した。ラテルネンデッケ天井は比較的精巧な造形で、練り土による塗壁層が良好に残り、変色、汚損が見られるものの彩色層も比較的多く残存している。

以上の観察により、この窟は床面側壁際に台座を配し、各側壁中央に大きめのニッチを設けて複数の彫像を設置するとともに、タンブールの計16面のニッチ内にも彫像が備えられていたと推察した。側壁から天井に至る岩盤面は全面練り土で地塗り（荒壁、中塗壁）したうえ、側壁、コーニス、タンブール部に装飾文様を練り土で造形している。堂内荘厳をさらに高めるため、窟内全面を彩色で彩った装飾要素が豊富な窟であったことがわかった。

ところで、内部南面の西隅付近および北面西隅付近の岩盤は縦に亀裂が生じている。これは53m仏龕の東面と平行的な位置関係にあり、53m仏龕と関係する構造的な亀裂の可能性がある。また、天井桁に数箇所明白な亀裂



図9 A上(c)窟 内部東面

が認められた。この亀裂は前記亀裂と連動する位置関係にはないので、上部岩盤からのプレッシャーによって生じている可能性がある。

調査成果(A上(c)窟) A上(a)窟と前室を共有し、軸線が(a)窟と90度振れた配置となる。方形平面で側壁が立ち上がり、円形の第1コーニス、タンブールにドーム天井が架けられている窟。側壁にはニッチが連なる。このニッチは東面が3面で、このうち中央1面は両脇のニッチより幅が広く、奥行きも深い(図9)。この面が窟の正面に当たることを物語っている。北面および南面は4面のニッチが連なり、西面は入口の両脇にそれぞれ1面のニッチを置く。床面側壁際に廻る台座はニッチ中央部を一段高めており、同上に彫像が安置されていたものと思われる。その構造から彫像は立像であったと思われる。なお、東面中央の幅広のニッチは台座も他所と異なる。すなわち床面側壁際の台座は同所中央両脇で止まり、中央ニッチ用の台座は奥まった位置に他所より高く造られている。ニッチと台座の規模から、この中央ニッチの彫像は座仏であったと思われる。

側壁は現在破損が著しいが、ニッチは本来半円アーチを支柱が支えるアーケードを模した意匠を持っていたものと推察される。このアーチ部は縁取りが練り土によって成形されていたことが残存する一部からわかる。ニッチ内部の壁面には彫像を支えていたと思われる木芯用ほぞ穴が穿たれている。

第1コーニスは円形で、側壁が方形であるため隅のコーニス下端に三角形の底面があらわれている。タンブールはニッチが穿たれ、このニッチも側壁ニッチと同様に連続する半円アーチを支柱が支えるアーケードを模した意匠となっており、その内部に彫像が備えられていたことが、木芯用ほぞ穴の存在から推察される。支柱は破損箇所を観察から、練り土により造形されていることがわ

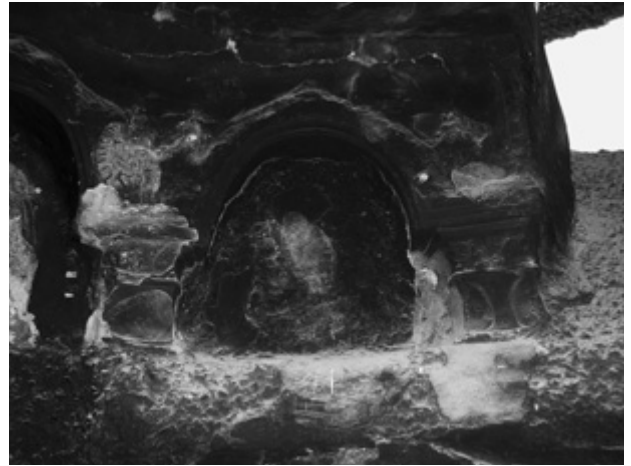


図10 A上(c)窟 タンブール部のニッチ造形

かる。アーチの縁取り面は後世に塗り重ねられた土壁によりその意匠が不明瞭となっている(図10)。

以上の観察から、この窟は計13面のニッチを側壁に配して彫像を安置し、アーケード状に設けられたタンブール部ニッチにも彫像を安置した窟であると判断した。

ところで、この窟はアーケードの形や縦横の配置のいずれにおいても、幾何学的な正確性や計画性が感じられず、きわめて粗雑にできている。一方、保存状態の良いタンブール部の造形を見ると、同所のアーチ部内側角から見付面に向かって3段の持ち出し飾りを練り土により精巧に成形していることに気付く。また、同所の練り土による支柱は植物文様と思われる装飾を伴った柱頭飾りを持つ造形であることが、一部保存状態の良い箇所からわかる。基盤である岩盤成形の粗雑さは否定できないものの、仕上げ工程での練り土による成形技術は元々精巧なものであり、この窟はパーミヤーンにおける土の造形技術の高さを示しているといつて良い。その素晴らしさが、後世の壁土による塗り重ねによって損なわれている点が惜しまれる。

なお、現状は、表面が全て黒い煤で覆われているうえに、天井に至るまで靴跡が人為的につけられ、保存状況はきわめて悪い。堂内には目立った亀裂は確認されなかったが、入口の真上と右肩には、縦に大きな亀裂が入り、入口上方に掘り出された梁状の構造の上端までこの亀裂が達している。

以上、2例の石窟を通してパーミヤーン石窟寺院の様相を紹介した。パーミヤーン石窟は、優れた左官技術によって造形されていること、この左官技術が伝統として近年の住居建築などに受け継がれていることが把握された。また、岩崖崩壊の進行により保存の危機に面している各石窟の現状を記録することは、急務のことといえる。

(窪寺 茂)